ウッディチキン／南九州例会

『例会レポート 191』

日　　程	2025 年 5 月 14 日(水)
会　　場	鹿児島市勤労者交流センター(よかセンター) 〒890-0053 鹿児島県鹿児島市中央町10番地(キャンセビル7階)
参加者数	約 23 名　内県外 13 名
講演会内容	受付 17:30 開始 18:00～ 講演 大谷 貴子氏 「生きてるってシアワセ！」
懇親会	20 時～　ハイパーチキン野郎

ウッデイキチン事務局

文章・写真提供／向井　健介

http://woodychicken.com　info@woodychicken.com

骨髄バンク・大谷貴子さんをお招きしての鹿児島定例会ご報告

快晴の空が広がり、すでに夏の気配が漂う鹿児島にて、骨髄バンク推進の活動で知られる大谷貴子さんをお招きし、定例会を開催いたしました。

大谷さんのご講演を久しぶりに拝聴いたしましたが、そのお話には変わらず力強さと温かさがあり、会場の一同が深く感動いたしました。ご自身の体験を通じて語られる言葉には説得力があり、命の尊さ、支え合いの大切さについてあらためて考える機会となりました。

また、今回の定例会では、鹿児島の仲間たちとも久しぶりに再会することができ、旧交を温めながら和やかな雰囲気の中で会が進みました。参加者の皆さまの笑顔と交流があふれるひとときとなり、最後まで心地よい時間を過ごすことができました。

ご参加いただいた皆さま、大谷貴子さん、そして準備にご尽力いただいた関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

司会：山下氏（トータルビューティサロン鹿児島）

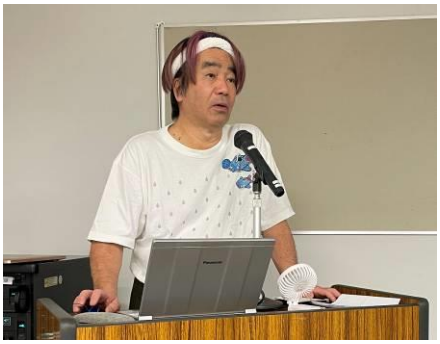
.

開会挨拶・南九州支部長挨拶　今垣内氏

ウッディ南九州が 4 回目を迎えました。

今回のゲストである大谷氏を招いたのは、南九州支部長自身が骨髄移植のドナーとなった経験があり、骨髄バンクや白血病について皆に知ってもらいたいと考えたためである。南九州支部長は大谷氏から骨髄移植を受けたと紹介されたが、その話は後で詳しく聞きたいとのことだった。

以前実施した熊本城見学について報告があった。熊本城は現在非常に綺麗であり、天守閣は 2021 年に完成し、中はまるで美術館/ミュージアムのようになっている。来訪を推奨していました。



ウッディチキン代表　伊藤氏　近況報告

ちょうど、今垣内氏が骨髄移植した際の話を思い出した

2023 年秋頃から「ワールドビューティネットワーク構想」を掲げている。

韓国の美容師との交流として、2～3 日間お互いのお店で働く交換勤務制度を始めている。これは他の団体ではできないことであると述べた。コロナ禍を経て交流が可能になった背景を説明した（2020 年のマスク支援がきっかけで仲が深まった、2022 年頃から交流再開、2023 年 6 月からコロナが第 5 類に移行し行き来できるようになった）。

ウンテンチキンコリアが立ち上がり、熱量が高いと感じる。

他の国（上海、台湾、ベトナム、タイ）とも交流を作っていく計画がある。

能登半島地震の被災者支援などのボランティアプロジェクトも継続している（熊本、東北、新潟、九州北部、佐賀の水害時も同様の活動を実施）。

中期テーマは「文技両道」であり、勉強と技術向上に励み、世界に通用する技術を磨き続けることを目指している。韓国との交流で技術スピードへの刺激を受け、スピードカットの練習も行っている。

アカデミー賞（年 2 回）や最高記録への挑戦といった表彰制度も実施している。

講演：大谷貴子氏

全国骨髄バンク推進連絡協議会 副会長

「生きてるってシアワセ！」

プロフィール
1961 年 6 月 10 日 大阪市生まれ。
1986 年 12 月 慢性骨髄性白血病と診断される。（在学中）
1988 年 1 月 母親から骨髄移植を受ける（4 月 退院）
1989 年 10 月 東海骨髄バンク設立
1995 年 6 月 全国骨髄バンク推進連絡協議会の副会長に就任
1998 年 1 月 「生きてるってシアワセ！」スターツ出版㈱より出版
2002 年 2 月 NHK「プロジェクトX」に日本骨髄バンクの創設者の一人として出演。
2005 年 3 月 TBS 系列「情熱大陸」に出演。
2008 年 3 月 著書「生きてるってシアワセ！」を原作としたドラマ「30 万人からの奇跡」がテレビ東京系列で放映。本人もゲスト出演
2015 年 4 月 公益財団法人日本骨髄バンク評議員に就任
2021 年 7 月 全国骨髄バンク推進連絡協議会 副会長に就任
自らの骨髄移植の経験をもとに、白血病患者の方々への支援の和を広げるため、全国各地での講演に精力的に取り組んでいる。

大谷氏の講演は、自身の白血病発病体験から始まりました。彼女は 25 歳で発病し、それは 38 年前のことであり、当時は**「イコール死の時代」**であったと説明しています。白血病の原因は不明であり、誰にでもなる可能性のある病気であると強調しました。
当時の治療法として骨髄移植が有効になりつつあったにもかかわらず、日本には骨髄バンクが存在しなかったこと、自身の命の危機に際して、姉から**「なかったら作ったらええやん」と言われたことが、骨髄バンク設立に向けた活動の大きなきっかけとなったことを語っています。多くの人々の協力を得ながら、されたこと、設立当初は「そこまでして生きたいのか」「人に骨髄もらってまで行きたいのか」といった偏見や、「骨を削り取られる」といった誤ったイメージ**があったことにも触れています。
講演では、骨髄バンクへの関わりが深い 2 名の具体的な体験談が紹介されました。

南九州支部長（今垣内氏）のドナー体験: 大谷氏の話を聞いて登録し、9 年後にドナー候補となり、実際に骨髄を提供した経験を詳細に語っています。登録自体は**「たった 2cc の採血だけ」**と簡単であり、献血のついでにできると説明しています。提供までのプロセス（複数回の検査、会社の協力、全身麻酔での骨髄採取手術、術後の回復）や、提供相手（東北地方の40代男性）から奥様を通じて感謝の手紙を受け取ったことに触れ、「当たった」（ドナー候補になった）時は「宝くじに当たったぐらいの感じでした」と表現しています。

・

デミの寺下氏の患者家族体験: 息子さんが 4 歳の時に再生不良性貧血（骨髄移植が必要な病気）になり、骨髄バンクのドナーが必要だった経験を語りました。マッチングしない場合は「死ぬ」覚悟をしていた中で、ドナーが見つかった時は**「めちゃくちゃ嬉しかった」と述べています。骨髄の輸送費が患者負担であったことにも触れ、現在息子さんは移植が成功して 24 歳であると報告し、彼にとって骨髄バンクは「本当にもう大切なやっぱりあの存在なんです」**と語りました。

これらの体験談を通じて、骨髄バンク登録や提供が可能な行為であり、それが患者や家族にとってどれほど大きな希望となるかが具体的に伝えられました。また、骨髄バンク登録に対する「壁」を感じる人（お客様との会話で南九州支部長が感じたこと）がいることに対し、大谷氏や南九州支部長は、登録は「門を叩くぐらい」の軽い気持ちで始められ、その後の環境やモチベーションの変化に応じて判断すれば良いというメッセージを伝えています。

骨髄バンク以外の社会課題への取り組み

大谷氏は、自身の白血病体験や骨髄バンク活動を通じて気づいた、より広範な社会課題への取り組みについても語りました。

・

妊孕性温存: 自身の不妊体験から、がん治療を受ける若い世代のための妊孕性温存の必要性に気づき、医療機関の連携を促す活動を行っています。

・

がん患者の就労支援: 若い患者が病気を理由に不当な扱いを受けないよう、「がんアライ部」のような活動を通じて、がんになっても仕事を続けられる社会を目指しています。

・

病室 Wi-Fi の整備と若年層の在宅看取り支援: 姪をスキルス胃がんで亡くした経験から、病室に Wi-Fi がないことの不便さ（特に血液がんや小児患者にとって）や、若い世代が自宅で最期を迎えるための制度が自治体によって異なる現状に気づき、国レベルでの制度整備に向けた活動を行っていることを詳細なエピソードを交えて語りました。これらの活動の一部（Wi-Fi 整備）は、コロナ禍も相まって国を動かし、病院への Wi-Fi 設置の促進に繋がったこと、在宅看取り制度も来月には国のヒアリングが始まり、国の制度になる可能性が高いことにも触れています。

・

公共トイレのゴミ箱設置: 知人（小倉智昭氏）や夫の経験から、男性用公共トイレにゴミ箱がないことが尿漏れパッドなどが必要な人々にとって困難である現状を知り、改善を訴える活動が大きな注目を集めたこと、この問題が多くの人にとって「自分ごと」として捉えられやすかったことを述べています。

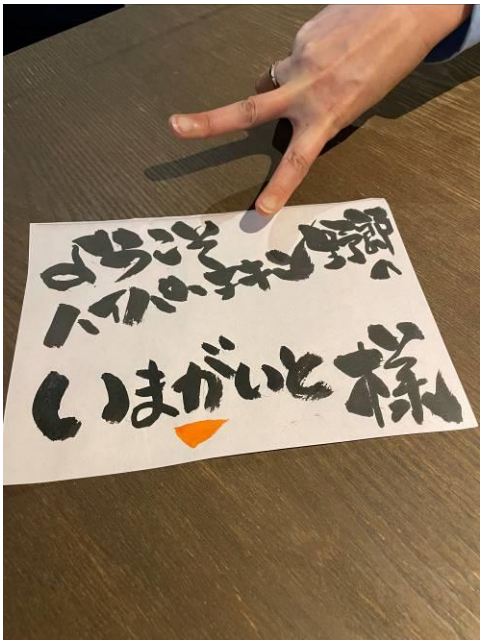
・

多様性への理解: 医療現場における、法的な家族でない同性カップルや障害を持つ家族への配慮不足の事例を挙げ、多様性を受け入れる社会の必要性を訴えています。

大谷氏は、これらの活動の原動力として「気づいたら我慢ができないタイプ」であること、そして**「一番ベースはやっぱり自分の身近に起こったこと」であることを挙げています。大きな社会課題から身近な不便まで、「困ってること」を変える力は誰にでもある**というメッセージを参加者に伝えています。美容関連のプロが集まる「ウッディチキンの会」骨髄バンクを「自分ごと」として捉え、登録という「門を叩く」きっかけを提供しました。

さらに、講演は骨髄バンク活動に留まらず、妊孕性温存、就労支援、病室 Wi-Fi、在宅医療、トイレ環境、多様性といった多岐にわたる社会課題に焦点を当てました。これは、大谷氏が述べたように、「日頃のお仕事の中で、何かこう気が付いたことを変えていく」ためのヒントを提供することを意図したと考えられます。
美容師という職業柄、多様な顧客と接する機会の多い参加者にとって、これらの社会課題への理解は、自身の視野を広げ、他者への共感を深め、そして自身の職場環境や社会に対する「気づき」や「行動」へと繋がる可能性があります。ウッディチキン代表の伊藤氏が被災者支援などの社会貢献活動にも触れていることや、ウディ南九州支部長がドナー登録・提供という形で骨髄バンク活動に深く関わっていることは、この「ウッディチキンの会」が単なる技術交流だけでなく、社会貢献や多様な価値観への理解も重視する場であることを示唆しており、大谷氏の講演は、その会の理念を具現化し、参加者の意識を高める上で重要な役割を果たしたと言えます。

懇親会



以上です。
ウッディ事務局　向井健介